

BMG物語～超次元編～

ストライク市村

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

誰もが知っている伝説の決闘王 武藤遊戯。

そのデッキの中には遊戯のエースモンスター、ブラックマジシャンの弟子であるブラックマジシャンガールが存在する。

これは、そんな違う世界で繰り広げられる彼女の物語

目次

B M G、別のゲームへ	1
3 人仲良く教会へ	13
ネプテューヌ登場	25
4 女神登場〔1〕	41

BMG、別のゲームへ

※思いつきと自己満で書くのでおかしな部分もあると思いますが、それでもいい方のみお願いします※

※この作品は台本形式です それでも良い方はお願いします

前書きにもありますが、主人公はブラックマジシャンガールなのでガールの一人称です、

くくくくくくくくくくくくくくくく

・・・またやつてる

遊戯（以後遊） 「俺のターン！」

海馬（以後海） 「来い！遊戯！」

遊（海馬の場はミノタウロスだけ、ここは場のガゼルを生贄にして・・・）

毎度毎度よくやるわね たまには休ませてよ（泣

遊 「俺は場のガゼルを生贄に捧げ！」

今回は出番早いわね・・・ まだ眠いのにな・・・

遊 「ブラックマジシャンガールを召喚!!」

海 「さあ 来い!」

・・・・しようがない、今日もがんばろ!! (ウキウキ)

(わかる人はわかるBMG)

BMG 「キラ☆」

決まった!!・・・ん?

BMG (今日は珍しいわね、こんな草原でデュエルなんて)

いつもは学校の屋上とか道の上なのに

BMG (あれ? 遊戯さんは?)

チラツと後ろを見たらわたしを召喚した人がいない 前を見るとミノタウロスも社

長さんもない

いつもの金髪さんもトンガリさんも誰もいない

BMG 「なに?」

きれいなところだけど、1人は少しさびしい 戻れるなら早く帰りたい

BMG 「うう・・・ 師匠お〜」

いつも怖いモンスターさんたちと闘ってるのに、1人ぼっちになっただけで涙目になるわたしって・・・

わたしメンタル弱いなあ

B M G 「・・・グス」

どうしよう、社長さんの青眼さんよりもいまの状況のほうが怖い

B M G 「・・・ん？」

しゃがんでひざを抱えていたら何か向こうに・・・

B M G 「なんだろ？」

青い何かがぼんぼんはなてる

わたしはそれが気になり近づいてみた

それは

B M G 「・・・リバイバルスライム？」

いつだかのデュエルで誰かさんの手下が使っていたモンスターに似てる 顔を見る

と

B M G 「・・・！かわいい！」

いぬのような顔をしていて手下のスライムよりもぜんぜんかわいい

・・・けど

B M G 「・・・数多すぎない？」

スライム増殖炉でもあるのかと思うくらいいた 単体ではかわいいかもしれないが

これだけいると気持ち悪い

BMG 「そ、それじゃあね〜」

気味が変わるくらいわたしはゆつくりそこを立ち去ろうとした　しかし・・・

BMG 「いやあああああああ!!」

スライムたちが波のようにわたしのところに来た！　なに!?　融合!?　融合されるの!?

それとも少し前に出たエクシーズ!?　それともシンクロ!?　わたし的にはどれもいや!!

BMG 「こないでよおおおおお!!」

わたしは全力で森のほうへ向かった！　あと少し・・・のところであたしは転んだ

BMG 「なんで!?!」

見ると足にスライムがくっついてた　スライムってわたしより早いんだ・・・

BMG 「!?まずい!」

波のようなスライムがわたしに迫ってくる　こうなったら!

BMG 「黒魔道爆裂波!!」

わたしはスライムを倒すことにした　襲ってくるほうが悪いよね!?

正当防衛だよ!!

B M G 「・・・ふう」

なんとか倒せたらしい 攻撃力はわたしの方が上みたいね!! (ドヤツ

B M G 「あつ」

まだスライムは残っていた・・・でも

B M G 「この子は・・・まあいいかな」

わたしは足についていたスライムを地面に置いた・・・わたし今結構ひどいことして
るわね・・・

するとスライムは森のほうへ消えていった なにかあるのかな？

B M G 「わたしも行こうかな？」

と、思ったがやめた またさっきのようなことはいやだもん・・・

これからどうしようかな・・・ わたしは落ち着いていまの状況について考えてみた

B M G 「・・・あれ？」

よく考えてみればスライムがいるってことは、ここってカードの中の世界なんじゃない？

そうだとしたらもう何も怖くない!!

B M G 「でも、あんなモンスターいたかなあ」

カードの中でも、デュエルでもあんなモンスターはみたことない また新モンスター

かな？

うーむ むずかしいよお

でもわたしは賢いから（だって賢者の宝石使えるもん！）どんなことも解決できるはず!!

・・・とりあえず

|| ||

B M G 「お腹すいたなあ」

スライムと闘ったせいかさごくお腹がすいた やっぱり考え事するなら栄養を取らなくちゃだめよね!!

そしてわたしは気がついた

B M G 「ごはんは?」

そう! ここにわたしの家はない! てことはご飯も、お金もなにもない!!
これはとてもまずい わたし餓死しちゃう!

B M G 「そんなむごい死に方いやよー! 遊戯さんが羽蛾さんに使ったバーサーカーソウルくらいむごいわ

よー!!」

せめてもつとかつこよく・・・そうコードネームがロックオンって人みたいに死にたい!

いや、そもそも死にたくないよ!

「ちよつと．．．大丈夫なの?このひと．．．」(チラ

「うくん．．．でも、ほつておけないでしょ．．．?」

「そうだけど．．．なんか格好も．．．」

「あははは．．．とりあえず．．．」

わたしはうつぶせになって泣いた　こんなの．．．こんなのあんまりだよお (号泣

B M G 「うええええええええ．．．」

「ついに泣き出したわよ．．．酔っ払いじゃない?」

「だとしてもほつておけないよ、あのくすみませくん」

はっ! この声は!?

B M G 「いやああああああああ!! 天使はまだ早わいよおおおお!!」

死者蘇生は!?! それかりピングデット!?! このさい黒魔族復活の棺でもいいわ!!

ていうかわたし死んでないよね!?! このままじゃ早すぎる埋葬よ!!

「て、天使つて．．．?」

「やつぱり酔っ払いじゃない」

このままじゃ早すぎた埋葬みたいな絵になっちゃうよ．．．

「よし、いまなら．．．えっと、しっかりして下さい!!」 (ユサユサ

B M G 「・・・？」

またうつぶせになったところで誰かに声を掛けられる わたしはそれを涙目で見上げる

「わあすごくキレイなひと・・・」

「ほんとだ・・・ じゃなくて!!」

この2人は？ やっぱり天使かな？でも羽も頭の上のわっかもない・・・ていうことは

わたしは1人を抱きしめた

「!? ふえ!?」

「!? ちよつと!?」

B M G 「よかった・・・！ わたし死んでないわ・・・」(ガシッ

生きている喜びを知ったわたし まあ今までも何度かモンスターに倒されてきたけどそれとこれは別 生きてるってすばらしい

「えつとその、いきなりそういうのは・・・」

B M G 「・・・あ」

わたしは抱きしめていた女の子を離す この2人が天使じゃなくて本当によかった・・・

「えっと、あなたの名前は？」

???????

「え？」

この子、わたしのこと知らないの？ ああ決闘王が使っているわたしを？

?? 「どうかしたの？」

B M G 「えっと、その・・・」

どうしよう・・・いまさら名前いうのもなあ それに「わたしはブラック・マジシャン・ガールよ！」なんてはずかしくていえない・・・考えろ・・・考えるんだわたし・・・

あ

B M G 「わたしの名前はマナよ」

さすがわたし！ とっさに偽名を思いつくなんて!!

??????? 「わたしはネプギアって言います」

?? 「あたしはユニよ」

ねぶぎあ？ ゆに？ どちらも聞いたことない名前だなあ やっぱり新モンスターなのかな？

とりあえずここがどこか聞こうかな

B M G 「ここどこなの？ 見たこともない景色だけど」

ネプギア（ギア） 「え、ならどうやってここに??」

B M G 「えつと・・・気がついたら・・・」

ユニ 「はあ？ なにそれ」

B M G 「う・・・」

しょうがないじゃない！ ほんとなんだから！

ギア 「ここはラスティションとプラネテューヌの国境にあるジェットセット山道です」

B M G 「？」

なんなの？ くに？ わたしが知ってる国なんて日本とアメリカとエジプトくらいよ！

ユニ 「・・・ねえあなたどこの出身？」

B M G 「え？」

出身かあ どこなんだろ

ユニ 「まさか、自分がどこの出身かわからないなんていうんじゃないわよね？」

B M G 「う・・・」

図星です ごめんなさい

ギア 「えつと・・・ここで話すのもあれだからうちの教会に移動する？」

ユニ 「・・・そうね」

3 人仲良く教会へ

※この作品は台本形式です それでも良い方はお願いします※

※B M Gは設定上マナとなっております

~~~~~

ユニ 「ねえ、マナ？」

わたしたちがプラネテユニーヌへ向かっているとユニちゃんがわたしに声を掛けてきた  
 た なんだろう？

B M G 「なに？」

ユニ 「あなたのその格好・・・なんなの？コスプレかなんか？」

B M G 「こすぶれ？」

こすぶれ・・・聞いたことあるような、ないような・・・

とりあえず違うと思うから否定しておこう うん

B M G 「えっと、違う・・・と思う・・・」

ユニ 「思うって・・・」

ネプギア (ギア) 「あははは・・・」

うう・・・わからないことばかりよう・・・

・・・よし、逆に聞いてみよう!

B M G 「わたしの格好つて・・・変・・・かな?」

ユ二 「・・・え」

ギア 「・・・えと・・・」

よくわからないけど2人が引いてるように見える どうして? ヴアルキリアやお師匠様も似たような格好してるじゃない

ギア 「えと・・・多分・・・」

ユ二 「変よ」

ギア 「ユニちゃん!」

変つていわれた! 遊戯さんにも言われたことないのに!!

にしてもそんなストリートにいわなくても・・・

B M G 「そんな・・・もう10年以上この格好なのに・・・」

ギア・ユ二 「10年!?!」

お師匠様はともかくヴアルキリアには教えてあげなくちゃ・・・ 女の子だもん!!  
やっぱりかわいくなりたいよね!

ギア 「失礼ですけど、マナさんはいくつなんですか?」

B M G 「わたし?」

ユニ 「ほかに誰がいるのよ」

B M G 「えつと・・・」

歳かあ いくつなんだろ・・・ うくん・・・多分

B M G 「14くらいかな?」

ギア・ユニ 「はあああああああああ!?!」

B M G 「え!?! なに!?!」

ものすごく驚かれた! 多分あつてると思うけど・・・

ユニ 「あんたその見た目で14だつていうの!?!」

B M G 「えと・・・多分・・・」

ユニ 「そんな・・・そんなの不公平よ・・・」

ギア 「ユニちゃん・・・」

気づけばユニちゃんが泣いている わたしなにか悪いことしたかなあ・・・

ネプギアちゃんがユニちゃんを励ましてる わたしも謝らないと

B M G 「あの・・・よくわからないけどごめ・・・」

ギア 「大丈夫だよユニちゃん! ブランさんを思い出して!!」(ユサユサ

ユニ 「はっ!!」

ぶらん？だれだろ？ 友達かな？！

~~~~~

ルウイーにて

ブラン 「うがああああああ!!」(ガツシヤアアアア！)

ロム 「・・・!?!」(ビクッ)

ラム 「なにになに?!? どうしたの!?!」

ブラン 「いや・・・なんか誰かにバカにされた気がして・・・」

~~~~~

ユニ 「ごめん もう大丈夫よ」

B M G 「そう・・・大丈夫?」

さつきまで落ち込んだのがうそみたい・・・なにがあつたんだろう

ギア 「マナさん、ユニちゃんも早く教会に行こう?」

ユニ 「そうね ネプテューヌさんも待ってるし」

B M G 「あとのくらいの距離なの?」

ギア 「そうですね・・・ここからだと3, 40分くらいです」

ユニ 「まあ、飛べば10分くらいだけどね」

まだ遠いんだ．．． ん？

B M G 「飛べばって．．． 2人は飛べるの？」

ユ二 「もちろんよ 女神だもの」

ギア 「候補生、だけどね」

B M G 「女神!？」

女神なんていたの!? それって3幻神みたいなものかな？

それよりもうお腹のほうも限界みたい．．．

B M G 「だったらそこまで飛んではいこうよ．．．」

ユ二 「飛んではいこうって．．． あんた飛べないでしょ？」

ユ二ちゃんが呆れたようにいう この子はわたしを誰だと思ってるのかな？

みんな知ってる!、ブラックマジシャンガールですよ!! この2人は知らないみたいだけど!

B M G 「もちろん 飛べるわよ」(ドヤ

ユ二 「はあ？」

ギア 「本当に飛べるんですか？」

B M G 「ええ」

わたしはおなじみのステッキにまたがった そして中へ浮く ふふふ、どう!

ユニちゃんとなぷギアちゃんはわたしを口をあけて見上げている

ユニ 「うそ……」

ギア 「ほんとに飛んでる……」

驚いているようね わたしを甘く見ないでよね！

しばらくすると2人がいるところが光った？ どうしたんだろ？

光が消えると2人の女の子がわたしのところへきた え!? 飛んだ！

ギア 「ほんとに飛べるんですね」

ユニ 「びっくりしたわ」

B M G 「え、あ、あの」

ネプギアちゃんとあともう1人は？ この銀髪さんはだれ？

ユニ 「あ、わたしたちは変身したら飛べるの 女神化っていうの」

ギア 「わたしはあんまり変わりませんけど……」

あ、なるほど この銀髪さんはユニちゃんか 変身かあ…… かつこいいいなあ さ

すが女神！ 後ろに羽もあるし！

ユニ 「ネプギア、マナ 行きましよう？」

ギア 「そうだね」

B M G 「あ、うん」

わたしは2人についていった あ、そうだ

わたしは気になったことを聞いた

B M G 「女神つて3幻神みたいなものなの？」

ユ二 「3幻神？」

ギア 「なんですか？それ」

3幻神を知らないの？ 女神なのに

ギア 「えっと、簡単にいうと国を護るために女神がいるんです」

ユ二 「ほんとに簡単ね・・・」

B M G 「護る？ なにから？」

ギア 「なにからって・・・悪いひと、かな」

ユ二 「適当ね・・・」

なんか、まったく違う世界に来たみたいね・・・ わからないことが多すぎる・・・

ギア 「あ、もうすぐ着きますよ」

B M G 「え？ おお！」

大きな街が見える！ 高いタワーもある！

でもいつもみている街とは違う気がするなあ こっちのほうが新しいというか、文化

が進んでるといいうか・・・

ギア 「あそこにあるプラネタワーがわたしたちの教会です」

B M G 「ながかったあ・・・」

ユニ 「ほんとにね」

やつとごはんが食べられる・・・ もうお腹ぺこぺこだよ

くしばらして〜

ギア 「ただいまー いーすんさーん！ おねーちやあーん！」

ユニ 「おじゃましまーす」

B M G 「お、おじゃまします」

2人がもとに戻り、ネプギアちゃんの教会の中へ入る きれいなところだなあ

イストワール（イス） 「おかえりなさい、ネプギアさん ユニさんも。」

中から本に乗っている妖精（？）が出てきた 小さいなあ クリボーみたい

イス 「あら、そちら方は？」

ギア 「あ、こちらの方はマナさんです」

B M G 「は、はじめまして マナです」

イス 「はじめまして プラネテユースの教祖をしています、イストワールです」

教祖っていうことは、偉い人なのかなあ 小さいけど

ギア 「お姉ちゃんは？」



イス 「出かけました また仕事もしないで・・・」（キリキリ

ユ二 「ははは・・・」

イストワールつてひとのお腹から変な音が聞こえる あ、わたしのお腹からも・・・  
それからネプギアちゃんにリビングのようなどころへ案内してもらい、いすに座ら  
せてもらう やつとごはんが食べられる・・・

ギア 「それじゃあなにか用意しますね」

B M G 「よろしくお願いします」（ペコ

わたしはネプギアちゃんに頭を下げた この恩は忘れません

イス 「それでマナさん？」

B M G 「はい？」

イストワールさんに話しかけられる なんだろう？

イス 「今日はどうしてここに？」

B M G 「あ、えつと」

ユ二 「ジェットセット山道を歩いてたら泣いていたわ」

B M G 「う・・・」

そのとおりだけど・・・

イス 「そうなんですか・・・なにかあったのですか？」

イストワールさんが聞いてくる うーん なんて言えばいいのかなあ・・・  
B M G 「えつと、気がついたらここにいました」

イス 「え？」

ユ二 「はあ・・・」

まあ、こうなるよね・・・ でもほんとうだもんなあ

イス 「それであなたは分けがわからず泣いていたと」

B M G 「うつ」

ユ二 「迷子の子供じゃない」

B M G 「うう・・・」

つらい こんなつらい思いしたかもしれないわ あ、目から涙が・・・

ユ二 「どうする？ イストワール？」

イス 「そうですね・・・ とりあえずプラネテューヌで保護します」

ユ二 「そう お願いね」

イス 「はい」

わたしを置いて話が進んでいく わたしどうすればいいんだろう・・・

ギア 「簡単なものですけど、用意できましたー」

ユ二 「マナ？ お腹すいてるんでしょ？ 食べなさいよ」

B M G 「・・・うん」

わたしはゆつくりとテーブルへ向かう　するとそこには・・・

B M G 「・・・おお！」

なんともおいしそうながはんが！　ネプギアちゃんすごい！！

B M G 「いただきまーす!!」

わたしはごはんを食べ始めた　ああ、あたたかい・・・

ユ二 「で、これからどうするの？」

イス 「詳しいことはネプテューヌさんが帰ってからにしましょう」

ギア 「そうですね」

ああ、おいしい・・・　ごはんがこんなにもおいしいなんて知らなかった・・・

わたしはこの世界に来てはじめてよかったと思つた

~~~~~

??? 「なんだ、案外はやかつたなあ・・・」

?? 「おい」

??? 「ああ？」

?? 「これでいいのか？」

??? 「ああ、いまはな・・・」

?? 「・・・」

~~~~~

最後までよんで下さり、ありがとうございます

B M Gの歳については原作の初登場から来ています、

## ネプテューヌ登場

※しつこいですが、この作品は台本形式です

※BMGは設定上、マナとなっています

~~~~~

BMG 「え、じゃあこの女神はネプギアちゃんじゃないの?」

ギア 「はい、わたしも女神ですがまだ候補生ですから」

イス 「プラネテューヌの女神はネプテューヌさんです」

BMG 「ならそのネプテューヌさんは?」

お仕事かな? 忙しそうだもんね

ギア 「お姉ちゃんは・・・えつと」

イス 「・・・ネプテューヌさんは遊びに出かけています」

BMG 「・・・まあたまには遊んだり・・・」

イス 「・・・ここ2ヶ月、仕事をしているところを見た記憶はありません」

ギア 「あはははは・・・」

ユニ 「まあ、今に始まったことじゃないわよね．．．」

なんだろう．．．女神って暇なのかな．．．

ギア 「ち、違いますよ!?! お姉ちゃんは普段はその．．．だからだらしてはいますが、や

るときはきちんとやる人なんです!!」

B M G 「ネプギアちゃん．．．」

やっぱりこの子はいいい子なんだと思う

B M G 「そ、そのつ、ユニちゃんも候補生なんだよね?」

ユニ 「ええ、そうよ」

B M G 「ユニちゃんの国はなんていうの?」

ユニ 「ラストイションっていうの、ここのとりの国よ」

イス 「あと他にもルウィーとリーンボックスという国があります」

B M G 「4つだけ?」

遊戯さんたちの世界だと．．．たしか．．．

ギア 「マナさんがいたところにはどのくらい国があったんですか?」

B M G 「150だったつ．．．」

ギア・ユニ・イス 「150!?!」

いや、もつとあつたような．．．あ、思い出した たしか

B M G 「196だったわ」

ギア・ユニ・イス 「そんなに!？」

前に社長さんが「この世界にある196ヶ国すべてに海馬コーポレーションの支社を作るのだ!!フハハハ!!」とか叫んでたわね 痛々しい

イス 「そんなに国があつたら大変そうですね・・・」

B M G 「そうなの？」

わたしにはよくわからないわ

?? 「ただいまー!! いーすん!? ネプギアー!？」

ギア 「おねーちゃん!!」

ネプギアちゃんが立ち上がる 誰だろ？

イス 「ああ、帰ってきましたね」

B M G 「？」

ユニ 「ネプテューヌさんよ」

B M G 「・・・ああ！」

ネプギアちゃんとイストワールさんが言っていた・・・

ネプテューヌ（ネプ） 「ねぶつ？ お客さー・・・」

B M G 「だらだらしてる人っ!!」

ネプ 「ねぶっ!?!」

この人が女神……あれ?!

ユ二 「まあ周りには「駄女神」なんて言われてるわね……」

イス 「駄女神……」

ギア 「あははははは……」

わたしはネプギアちゃんとお帰ってきたひとを比べてみるけど…… やっぱり

B M G 「ねえ、ネプギアちゃん?」

ギア 「はい? なんですか?」

B M G 「あの子……妹……よね?」

ネプ 「ねぶっ!?!」

ギア 「……えつと……」

ユ二 「まあ、しようがないわよ」

帰ってきた人を見る……うん、どうみてもネプギアちゃんより上にはみえないわね

こんな子が女神なわけないよね

ネプ 「もー!! 帰ってきていきなり失礼じゃない?!」

B M G 「わっ!」

妹ちゃんが怒り出した!

ギア 「えつと・・・この人がわたしのお姉ちゃんです」

イス 「・・・そして、この国の女神であるネプテューヌさんです」

B M G 「・・・ええ!?! この子が!?!」

ネプ 「さつきから失礼だよつ!?! ねえ!!」

そうなんだ・・・この人が・・・でも

B M G 「こんな子供に女神なんて・・・それはムリですよ!」

ネプ 「子供!?!」

ユニ 「・・・クスクスツ」

ネプ 「ユニちゃん!?!」

イス 「まあ、ネプテューヌさんは子供ですよね」

ネプ 「いーすんまで!?!」

ギア 「えつと・・・お姉ちゃんはお姉ちゃんだよつ!」

ネプ 「どーゆー意味!?!」

こんな子供なら仕事をほつといて遊んじやうのもわかるわ 子供のときは遊びたい

よね!

ネプ 「ちがーうつ! わたしは子供じゃなあい!! ネプギアのお姉ちゃんなのー

!!」

イス 「まあ、一応そういうことなので……」

B M G 「……ほんとなの？」

まだ信じられないわね……

ネプ 「あーっ！ この子まだ信じてないよー!!」

B M G 「……」

ネプ 「しようがないっ！ こうなったら！」

一瞬目の前が真っ白になる なにがあつたんだろう？

……目を開けると……

ネプ 「……ふう」

B M G 「!？」

さっきまでいた子はいなくなつて、変わりにすごくきれいな人がいた だれ!?

B M G 「えっ!? あなたはっ!？」

ネプ 「ふふ、これで信じてもらえたかしら？」

え！ もしかしてさっきの子なの!?! まったくの別人だよ!!

ネプ 「変身を見るのは初めてかしら？」

B M G 「か……」

ネプ 「か？ どうしたの？」

B M G 「かつこいいい．．．」

ネプ 「．．．え？」

わたしはボーと目の前にいる人を見てしまう　．．．はっ！　これはもしかして！

B M G 「これは．．．恋!?!」

一同 「二二急にどうしたの!?!」

顔が熱くなる．．．　こんなの始めて．．．

ネプ 「え、ちよつと．．．大丈夫？」

B M G 「ひ、ひゃい！」

ギア 「ちよつと!?!　マナさん!!　ダメですよ！」

ユ二 「そうよ！　それはネプテューヌさんなのよ!?!」

ギア 「お姉ちゃんは渡しませんっ!!」

ユ二 「ネプギア!?!」

B M G 「．．．」(ガシッ)

わたしは目の前の美女に抱きついた　ああ．．．　いいにおい．．．

ネプ 「ちよつと!?!」

ギア 「おねえーちゃあああん!!」

ユ二 「落ち着きなさい!!　ネプギア！」

ギア 「だって……だってええ！」（号泣）

ユ二 「ああ、もう！」

イス 「みなさん……」

すりすり わたしはその柔らかな胸に顔をうずめる ああ…… 幸せえ……

ネプ 「やつ、いやつ……」

ギア 「おねええちやあああん！」

ユ二 「こらっ！ ネプギア！」

イス 「……いい加減にしてくださいっ!!」

それからイストワールさんにお説教されました……

くくく1時間後くくく

イス 「……ふう 今日はいくらいいいでいいでしょう」

B M G 「あ……あしが……」

ネプ 「わたしのかわいいふくらはぎがあ」

ギア 「だ……だめ、立てない……」

ユ二 「なんでわたしまで……」

あれから1時間 ネプテューヌさんが変身を解いてそれからみんな（特にわたし）次

第に正気に戻り、イストワールさんにお説教をされ、今に至る あしがああ・・・つ、
つりそうう

イス 「それでネプテューヌさん？」

ネプ 「なに？ てかさいーすんお説教長すぎるよう」

イス 「ネプテューヌさんが反省しないからですよ」

ネプ 「今回のはわたしそれほど悪くないんじや・・・」

イス 「ともかく、ネプテューヌさん？」

ネプ 「なにー？」

イス 「今日はどこに行つてたんですか？」

ギア 「今日はブランさんのところだっけ？」

ユニ 「毎日毎日いろんなところに行くわね・・・」

ネプ 「いやーほんとはブランとロムちゃんラムちゃんと遊ぼうと思つただけ
ど・・・」

ネプテューヌさんがポケットから何か出す 何だろ

ネプ 「行く途中でこんなの見つけてねー ブランと少し調べてみたんだけど・・・」

イス 「・・・なんですかこれは？」

ギア 「なにになに!? 新しいメカ!？」

ネプテューヌさんが机の上に置く・・・それは

B M G 「・・・デュエルディスク？」

ネプ 「ん？」

そう、それは 遊戯さんや社長さんが腕につけているものとよく似ていた というよりそのものだ

B M G 「どうしてこれが？」

ネプ 「なにになに？ これ知ってるのー？」

B M G 「えつと・・・まあ、一応・・・」

わたしよりも遊戯さんたちのほうが詳しいと思うけど・・・

ネプ 「あーっ！」

B M G 「つどうしたの？」

ネプ 「ていうか、わたしたちまだ自己紹介しっかりできてないねーっ」

B M G 「え？あ、そうね」

ネプ 「わたしネプテューヌ！よろしくねっ！」

B M G 「わたしはブラ・・・コホンッ」

ネプ 「ぶら？」

B M G 「い、いえ！ えと、マナです！ よろしくねっ！」

危なかった・・・ つい本名を出すところだったわ・・・

ギア 「それで、これはなんですか!？」

B M G 「えっ?」

ネプギアちゃんに興味津々っていう感じで聞いてくる こういうの好きなのかな・・・
うくん なんていえばいいんだろ・・・

ユ二 「ほんとになんなのこれ?見たことない機械ね」

イス 「確かに興味ありますね」

2人も興味津々だ うくん・・・とりあえずわかることだけ言おう

B M G 「えっと、これは腕につけて」

ネプ 「腕に? あっ!ここだね!」

ギア 「それでそれで!？」

ユ二 「あんたほんとこういうの好きよね・・・」

B M G 「・・・え」と

・・・これだけしかわからないわね どうしよう

ユ二 「ここになにか入れるんじゃない?」

B M G 「え?」

ユニちゃんが言っているのはデックスペースだ うーん デッキがなきや始まらないなあ・・

イス 「少しわたしのほうで調べてみます。それでいいですか？」

ネプ 「うん、いいよー」

ギア 「わかりました」

ユニ 「何かわかったら教えなさいよ」

イス 「マナさんもそういうことでよろしいですか？」

B M G 「あ、はい」

わたしが持っていてもしようがないしいいよね

ギア 「あ、ならこれもいいですか？」

イス 「はい？」

ユニ 「あ、すっかり忘れてたわ・・」

なんだろ？ 2人もなにか拾ったのかな？

ネプ 「なにになに？ 2人もなにか拾ったのー？」

ギア 「うん、でも・・」

ユニ 「なんかカードみたいなものよ」

B M G 「カード？」

2人が拾ったというカードを見せてもらおう　．．．それは

B M G 「遊戯さんのデツキ!？」

ネプ 「えっ?」

ユ二 「い、いきなりなによ」

イス 「遊戯?」

ギア 「デツキ?」

そうそれは　最強の決闘王であり、わたしたちを使っている遊戯さんのデツキ
だった

．．．ただ

B M G 「．．．なに?このカード?」

みると魔法、罫は遊戯さんが使っているものだが、モンスターを見ると．．．

B M G 「あれ?絵がない」

そう、色や枠があるだけで　レベルも　効果も　名前も　絵も　なにもないカード
だった

そのなかに

B M G (．．!?お師匠様とヴァルキリア!?)

わたしの良く知る2人はいつものままだった　・・・そして

B M G (・・・3幻神)

3幻神のカードも、いつものままだった　・・・どうしてモンスターでこの3枚だけ

?

いや、あと1枚あつた

B M G 「クリボー?」

ネプ 「なにこれ?かわいーっ」

よくわからないけど、これはわたしが預かろう

B M G 「すみません」

イス 「はい?」

B M G 「このカードはわたしが預かってもいいですか?」

イス 「?ええ、かまいませんよ」

・・・どうして遊戯さんのデッキが・・・ それにお師匠様とヴァルキリアとクリボー、

そして3幻神・・・

ユニ 「それじゃあわたしは帰るわよ」

ギア 「あ、うん」

ネプ 「ノワールによろしくねー!」

ネプ 「わたしもシャワー浴びてくるねー」

イス 「ネプギアさん？書類の整理手伝ってもらえますか？」

ギア 「はい」

みんななくなっちゃった・・・

・・・よし わたしはこの遊戯さんのデッキのことを考えてみよう

なにかわかるかもしれないし！

~~~~~

??? 「うまくいってるな・・・」

?? 「あいつら、うまいこと拾ってったぞ」

??? 「よくやった・・・」

?? 「そろそろ教えてもらおうか」

??? 「?なにをだ」

?? 「とぼける、貴様のことだ」

??? 「おれのこと？」

?? 「そうだ」

??? 「・・・」

??? ?? ??? ??

「なんだ？いえんのか？」

「ああ、今はな」

「なに？」

「まあ、まってるよ、マジエコンヌ様よお」

~~~~~

4 女神登場 [1]

※この作品は台本形式です

B M G は設定上「マナ」となっています

~~~~~

B M G 「う〜ん」

あれから数日たち、わたしなりにいろいろ考えてみたけどなんにも思いつかない  
あの日から特にこれといった進展もないからどうしようもないなあ

ギア 「この服と杖ここに置いておきますね〜」

B M G 「あ、はい」

そう、わたしはネプテューヌさんに「さすがにその格好は・・・」といわれてネプギ  
アちゃんとあの後來たコンパさんから服を借りることになった（ネプテューヌさんとア  
イエフさんの服は胸がきつくて着れなかった）

ちなみに今はコンパさんの服を着ています

ネプ 「ねえねえ〜」

ギア 「どうしたの？お姉ちゃん」

さつきまでゲームをしていたネプテューヌさんがコントローラーを置きこつちへ来た

ネプ 「そういえばね、ブランがルウィーの近くの洞窟でなんか見つけたって」

ギア 「洞窟？なんだろう」

ネプ 「ん、わかんないけど暇だし行ってみる？」

B M G 「暇って・・・」

そう、ここに来てからこの人が働いてるところをわたしは見ることがない 大丈夫なんだろうか？

ネプ 「もしかしたらマナちゃんになにか関係あるものかも知れないし」

ギア 「そうかなあ・・・」

ネプ 「いいじゃん、行こうよ？ね？」

B M G 「そうですね」

もしかしたら本当になにか手がかりかもしれないし、この世界をいろいろ見てみたい  
ギア 「そうだね、ロムちゃんとラムちゃんにも会いたいし」

ネプ 「決まりだね、それじゃ、レッツゴー！」

・・・ほんと元気ね、この人は

~~~~~

ブラン 「よく来たわね」

ルウィーというところに着き、その国の協会に行くとい人の女の子が立っていたわあ、雪が降ってる

ブラン 「？ そっちの人は・・・？」

B M G 「あ、マナって言います」

ネプ 「今プラネテニューヌで保護してるんだー」

ブラン 「保護・・・？」

B M G 「保護って・・・」

まあ、合ってるかもしれないけど・・・

ブラン 「まあ入って」

3人 「「お邪魔します」」

教会の中へ入る ここも大きいなあ

ギア 「あ、ロムちゃん！ラムちゃん！」

ラム 「あ！ネプギアちだ！」

ロム 「あ・・・ネプギア・・・」 (パアアア)

よく似た女の子が2人、ネプギアちゃんの方へ向かっていった ネプギアちゃんも

走っていく

ブラン 「あの2人はネプギアに任せるとして・・・」

ん？ ブランさんに見られる なんだろう？

ブラン 「あなたはどうするの・・・？」

B M G 「あ・・・えつと」

そっか、いきなり来た勝手に付いていくのもなあ

ネプ 「いいじゃん、ブランも 付いてきても」

ブラン 「・・・そういうわけにはいかないわ」

B M G 「そ、それじゃあわたしはここで待つてますね」

そういうと2人は奥の部屋へ向かっていった そっか・・・あの人がこの国の女神なんだ・・・

ネプ テューヌさんと同じ歳みたいだし

くくくしばらく経ちくくく

B M G 「・・・ん？」

なんだろう、ネプテューヌさんらしき人がこっちへ走ってきた

ネプ 「来て来て来てええー！ マナちゃああん！」

B M G 「え!? あの、ちよつと!」

いきなり腕を掴んで走っていくネプテューヌさん どうしたんだろ?

奥の部屋に入るとそこには・・・

B M G 「・・・このカードは!」

それはわたしが良く知るカードによく似ていた でもそのカードには・・・

B M G 「?名前も絵もない?」

そう、あるのは裏の模様と枠だけであとはなにも書いてない なんだらう?これ

ネプ 「ついでにこれも何か知ってる?」

B M G 「ん?・・・あ!!」

ネプテューヌさんが持ってきたものは・・・

B M G 「たしか・・・千年パズル!」

遊戯さんがいつもつけている千年アイテムだった どうしてこれが・・・

ブラン 「いろいろ知っているのね・・・あなた・・・何者なの?」

B M G 「あ、その・・・」

何だろう、なんていえばいいのかな・・・

ネプ 「あー、そういえばみんなにまだ何にも言ってなかったねー、よし!久しぶりに

みんな集まろーか!」

ブラン 「・・・さすがに急すぎるわ・・・」

ネプ 「そうだねー、じゃあー1週間後くらいにする?」

ブラン 「そうね・・・」

2人が部屋を出ようとするのでわたしも付いていこうとする　・・・すると

??? (・・・い・・・ル!)

B M G 「?」

なにか聞こえたような気がして後ろを向く　んゝ誰もいない

ネプ 「どうしたのゝ?」

B M G 「あ、いえ」

また前を向く　すると

??? (お・・・だ!　ゆ・・・!)

B M G 「?遊戯さん?」

なんか聞こえてくる声が遊戯さんの声に似ている　なんだろう

気になって千年パズルの近くに行ってみる

??? (俺だ、遊戯だ!聞こえるか!?　ブラックマジシャンガール!)

B M G 「遊戯さん!」

今度ははつきり聞こえた、千年パズルから聞こえてくる声は、遊戯さんの声だった
遊戯（良かった・・・近くならちゃんと伝わるようだな）

ネプ 「なにになに？どうかした？」

ブラン 「何かあったの・・・？」

B M G 「いや、えつと・・・」

2人に遊戯さんの声は聞こえていないみたいだ

どうしよう でもせつかく手がかりが見つかったわけだし、ここは

B M G 「あの、すみません」

ブラン 「・・・なに？」

B M G 「これ、わたしに譲ってもらえませんか？」

ブラン 「・・・え？」

わたしはブランさんをお願いしてみた 遊戯さんがいれば何とかなる気がする！

ネプ 「いいじゃんブラン、どうせいらないでしょ？」

ブラン 「・・・そうね、いいわ」

B M G 「ありがとうございます！」

よかった・・・やさしい人でよかった

ネプ 「じゃあ、今日はもう帰ろっか」

B M G 「あ、はい」

ブラン 「そう・・・」

3人で部屋を出て外へ向かう 途中でネプギアちゃんと合流し外へ出る

ネプ 「じゃあーねー！ブラーン！ロムちゃあーん！ラムちゃあーん！」

ネプ テューヌさんが大声で手を振る・・・ほんとに子供みたいね

ギア 「マナさん それ、なんですか？」

ネプ ギアちゃんに声を掛けられる そうだ、さつきいなかったんだ

B M G 「これは、えつとわたしがよく知っている人が持っているものです」

ネプ 「あのカードとか機械と関係あるのー？」

B M G 「そこまでは・・・」

遊戯 (おい、ブラックマジシャンガール) 「以後B M G」

B M G (は、はい)

遊戯 (ここは一体なんだ?)

B M G (・・・)

遊戯 (わからないか・・・)

さすが遊戯さん 言葉がなくてもわかるなんて

遊戯 (それにその格好は?)

B M G (これは借りました)

遊戯 (この2人にか?)

B M G (そうです)

正確にはコンパさんのだけれど、まあそこはいいだろう

ネプ 「じゃ、帰りも飛んでこーか」

ギア 「そうだね」

B M G 「あ、はい」

2人がすぐに変身する ああ・・・おねえさまあ・・・

ネプ 「・・・この姿になると子のこの目が変わっているようにみえるわ・・・」

ギア 「あはははは・・・」

遊戯 (お前・・・)

B M G (・・・はっ! ち、違います!これは・・・)

もう1回変身したネプテューヌさんを見る・・・ああ、素敵・・・

ネプ 「・・・とりあえず、教会へ戻りましょう」

ギア 「そうだね、お姉ちゃん」

B M G 「あ、まって下さい!」

我に返り2人についていく ああ・・・ずっと見ていたい・・・

遊戯 (おいBMG?)

BMG (あ、なんですか?)

遊戯 (なにか、お前がわかっていることを教えてくれ)

BMG (えつと・・・)

~~~~~説明中~~~~~

遊戯 (・・・・・・)

BMG (・・・・遊戯さん)

遊戯 (わかっていることが少なすぎるな、もう少し情報を集めてくれるか?)

BMG (わかりました)

情報かあ どんなことを聞けばいいんだろう

ネプ 「ねえ? マナ?」

BMG 「は、はい!」

変身したネプテューヌさんに声を掛けられる 声まで素敵・

ネプ 「教会に着いたらもう1度、あなたのことを詳しく教えてもらえるかしら?」

BMG 「はい! よろこんで!」

ネプ 「そ、そう ありがと」

遊戯 (よし、そのときになにか聞けることを・・・て)

B M G 「ああ．．おねえさまあ．．」

遊戯（．．．．．）

遊戯さんの言葉も今のわたしには届かない だって目の前にお姉さまがいるんだから！

わたしは教会に着くまでずっとネプテューヌさんを眺めていた

~~~~~

「．．．来たか、遊戯い」

??????? 「今度は俺が、お前を闇に葬ってやる．．．」